

生徒と教師の助走期間としての 3年生0学期の意識付け

2年生3学期を3年生0学期と設定する意味はなにか？

単なる時間の先取りではなく、

「この時期だからこそ始める」という意味を生徒、教師双方が確認し、
生徒と教師の行動が変わる「確かな助走期間」としての意識付けを行いたい。

※このコーナーは、高校の先生方との会議を経て制作しています。掲載しているデータなどは、先生方が実際に活用されているものを基にしています。

3年0学期の指導の重要性を具体的に把握するために

図1 3年0学期学年団の指導の目線合わせシート

ダウンロード

	学校全体の動き	担任の動き	指導のポイント
高2 12月	志望校調査	面談	<p>●3年生0学期の意識付けを開始する</p> <ul style="list-style-type: none"> 受験直前に「あと3か月あれば!」と後悔しないために2年生1月から3年生0学期が始まることを説明する 校外模試、センター試験への挑戦で入試を肌で感じ、理解させる 教師自身が入試研究に取り組み、3年生(0学期)に合った指導の準備を行う
3年0学期	1月	志望校仮設定	<p>●入試と授業のつながりを理解させる</p> <ul style="list-style-type: none"> 自己採点を通してこれまでの授業内容だけでセンター試験で6割は得点できることを実感させ、授業中心の学習計画を立てさせる 校外模試や実力テストの出題ポイントがセンター試験と重なっていることに気付かせる センター試験への挑戦で自信を失った生徒に対しては、2年生の学習範囲から出題されるマーク模試をうまく活用し意欲を高めたい 校外模試の成績票の返却に合わせて、生徒の学習状況を改めて確認する <p>●基礎固めを徹底させる</p> <ul style="list-style-type: none"> 校内テストや校外の基礎学力テストなどを利用して、1月からの学習の成果を検証。「やったら出来た」を実感する場をつくる 安易に目標を下げさせない一方で、選択肢を広げるために第2志望を意識させる 特に難関大志望者には高い目標に見合った強い意識付けを行う
	2月	センター試験への挑戦 ・自己採点 ・学習計画作成	
	校外模試 ↓ 成績票返却		
3月	校内模試、スタサポなど 志望校調査	面談 (特に難関大志望者)	
高3 4月	進路講演会	面談週間	<p>●6月の模試を天王山と捉える</p> <ul style="list-style-type: none"> 受験校選択やその後の受験対策に大きな影響を持つ6月の模試を目標に学習を進めるように意識付けをする 2年までの学習範囲の復習は出来るだけ6月までに終了させる
5月		保護者懇談	
6月	校外模試	面談	

1

【教師間でのデータ活用】
取り組みを有機的につなげる3年0学期の目線合わせ

ダウンロード

このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
<http://benesse.jp/berd/> →HOME>情報誌ライブラリ(高校向け)>生徒指導・進路指導ツール集

プラス α の指導

「やれば出来る」から 「やったら出来た」へ

授業を大切にすることで入試対策の土台が出来ることを生徒に納得させるためには、授業を大切にすれば成績も上がったという経験、つまり「やったら出来た」という経験が必要だ。2、3月に基礎学力の定着を測るテストを実施するのが最適だが、その場がなければ授業前に小テストを実施するなど工夫し、成功体験を積ませたい。一方で、「やってもうまくいかない」生徒も確実に存在する。そうした生徒には「今の失敗経験があるから、入試前に慌てずに済む」とフォローした上で、改善策と一緒に考えていく。

2年生は個人が 団体をつくる時期

2年生は部活動の内容により、個々の生活状況が多様で、一律の指導で対処するのは難しい。2年生は、個々に合わせた自律指導の総体としてクラスを運営し、「個人が団体(クラス)をつくる時期」と捉えたい。一方3年生は、部活動を引退すれば入試という目標で目線が合うため、一斉指導の効果を発揮しやすくなる。不安と戦うためにクラスの勢いを支えるなど「団体が個人をつくる時期」とも言える。2年生と3年生では進路意識や日々の学習への取り組み、生活実態が大きく異なることを念頭に置いたクラス運営を心がけたい。

各教科の担当者からも 処方箋を出す

この時期、各教科担当と生徒が関係を築いていくことも必要である。例えば、生徒の中には教科内容の質問で職員室を訪れたことがない者もいる。そこで「3年生になっていきなり質問に行くのではなく、今から職員室に質問に行く習慣を身に付けよう」と担当が声を掛ける。同時に、学年団でもそれぞれの生徒に対して、どのような学習が必要なのか、教科担任からもアドバイスをしよう促していく。

活用後のフォロー

◎3年生0学期の取り組みは、次年度の3学年団に引き継いでいく、ある意味、先行投資型の指導である。そのため、その成果を2学年団が検証できるとは限らない。しかし、だからこそ、学年主義にとらわれず、学校全体の取り組みとして形作っていく意識が必要だ。まずは、図1を進路指導部のデータフォルダなどに残し、随時改訂を加えるなど、以降の学年に確実に引き継げるようにしたい。4月から生徒を引き継ぐ3学年団も、折に触れて図1を確認し、目の前の生徒がどのような指導を経てここにいるのかを理解していく。生徒の成長を指導の連続性の成果として俯瞰する視点を教師が持つことで、その学校ならではの指導が継承されていくことになる。

データ活用 のねらい

3年生0学期を助走期間として意識

3年生0学期は生徒と教師の助走期間 ●教師の日々の声掛けは、生徒を変える最も有効な指導であるが、生徒に浸透し、行動となって現れるのは2、3か月後というのが現実だ。また、入試を直前にして多くの教師が「この生徒はあと3か月あればもっと伸びただろう」と時間不足を嘆いた経験があるはずだ。図1で3年生0学期の指導がその後の取り組みにどう結びつくのかを学年団で目線合わせし、3年生4月には受験生へと転換させ、入試本番に学力のピークをもって来るようにしたい。3年生0学期は変わる時期ではなく、生徒にとっても、教師にとっても変わるための助走時期なのだ。

入試は授業の延長線上にあることを理解させる ●この時期はまだ「入試」を自分の問題として捉えるのは難しい。センター試験を活用し、2年生までの履修内容が出題内容の過半数を占めることに気付かせ、今の授業が入試につながっていることを伝えたい。

データ活用 の流れ

指導の目線合わせで結束力の強い学年団へ

どんな受験生を育てるのか目線を合わせる ●2年生2学期の後半の学年会で図1を利用して、3年生6月までの進路行事の意味や指導内容を確認、共有する。ここでのキーワードは「授業を大切にす受験生の育成」である。取り組みの軸になるのがセンター試験だ。0学期のスタートとして入試1年前に、校内で受験・自己採点の体験をさせる。その後、面談を通して学習計画の立案と検証を重ね、校内外の模試で実践力を測る。入試をプレ体験させ、それを踏まえて授業本位の学習習慣へとつなげていく。

指導の関連性を強く意識する ●センター試験で意識を高めた生徒を指導するには、最新の入試の知識が不可欠。だからこそ、12月に教師も入試研究を始めたい。また、センター試験後の学習計画の成果を検証する場を学年としてどのテストと位置付けるかや、テスト後に面談の機会を確保するなど、指導の連続性の確認が重要だ。

0学期の意味を 3年生4月以降と 結びつけて 理解する

2年生12月までの学年会で図1のような資料を基に指導の流れ、関連性を共有

センター試験のプレ受験体験、その後の校内模試や面談などで、「授業中心で受験を戦える」ことを繰り返し説明する

生徒の意識変化と学習状況の改善をチェックする

0学期の取り組みを3年生4月以降の指導へとつなげ、真の受験生としてのスタートを4月に切らせる

プラス α の指導

志望校は「決定」ではなく「設定」

2年生の段階で志望校を「決定」している生徒はまだ少ない。また、決定するだけの根拠や展望がないことも多く、狭い視野や思い込みで性急に決定させることも避けたい。よって、3年生0学期の志望は「決定」ではなく、担任のアドバイスも踏まえた「設定」であることを強調したい。決定する必要はないが、設定することで目標に向けた具体的な努力が始められる。特に、難関大志望者は、この段階からの対策があとになって大きな力となっていく。

受験のためだけではない学習の重要性を伝える

5教科の自分の成績を目の当たりにして、受験勉強に負担を感じ、安易にアラカルト方式の受験に走ったり、3教科型に絞り込もうとする生徒が現れやすい時期でもある。そうした生徒が出てくる前に、LHRなどで「受験勉強は合格だけがゴールではない。5教科を粘り強く学び、幅広い教養を身に付けることが、社会人基礎力につながる」ことを伝えていきたい。その際、企業の就職試験などで用いられるSPI試験の内容を見せてみるのも効果的だ。

入試本番に学力のピークをもってくることを意識させる

自校の現役生の入試本番までの伸びを属性別にパターン化し、学力曲線として提示している学校もある。そのような学校の生徒は、「部活動を引退して、この時期から成績が大きく伸びるはずだ」と、イメージを持っているだろう。3年生0学期を生かすことで学力曲線は3か月分前に平行移動し、入試本番でのピーク値もその分上昇する。スタートを早めに切ることで学力曲線も変化することを理解させ、受験生への切り換えの重要性を更に強調していきたい。

活用後のフォロー

◎図2は今後も模試の個人成績票の返却があるタイミングで繰り返し使用していくことにより、生徒自身が自分の成長を把握する記録となっていく。図3は新3学年団と歩調を合わせ、生徒に適した内容になっているかを随時確認しながら、少なくとも3年生4月くらいまでは使用したい。3年生になったからといって目新しい学習法や教材に飛びつくのではなく、これまでと同じように、授業を中心とした学習の継続が重要であることを生徒に実感させるツールとなる。3年生0学期の取り組みが成功すれば、3年生からの特別な変化は無用となる。授業中心の自律的な学習スタイルが、3年生4月に完成していれば、受験生として最良のスタートだ。

データ活用
のねらい

ギャップは「授業で埋められる」と指導

目標とのギャップから、生徒を「やる気」にする●図2は生徒に自身の目標と現状をプロットさせたレーダーチャートと、生徒に前を向かせる面談指導の流れである。まずは、現状と目標とのギャップを把握させ、自身の弱点と目標を明確化することが重要だ。

「何が足りないのか」を意識した自宅学習計画・記録表●図2で生徒に現状と目標のギャップを感じさせたところで、図3では具体的に行動レベルにまで落とし込めるように指導する。「自分には何が足りていないのか」「どんな学習が必要なのか」を考え、「すべきこと」を具体化し、日々の学習への取り組みを自分でチェックさせる。0学期に教師が手を掛けることで、3年次には、自分で弱点を意識し、それを埋める具体的なアクションのとれる生徒が育つ。現状と目標との学力ギャップを埋めていくのが受験勉強であり、その中心に授業の徹底活用があるのだという前向きな姿勢にしていくことが狙いだ。

データ活用
の流れ

目標の自分とのギャップを埋める

教科の弱点をビジュアル的に把握させる●模試の返却時に、登録した志望校が現時点での自分の志望校として相違がないかを確認してから、目標の自分と現在の自分との教科別学力ギャップを把握させる。その後、設問別正答率などを見て、自分には今後どんな学習が必要かを具体的に考えていく。その過程で、担任は面談などを実施し、「そのギャップは授業で十分埋められる」ことを個別に訴えていく。

弱点補強計画を自分で描かせる●目標と現状のギャップを埋める学習を、図3を使って具体化する。目標を書かせ、その達成のためには、どの教科をどれくらい学習する必要があるのかを考えさせ、時には教師がサポートに入りながら記述させる。学習計画表が完成したら、その後は適宜、面談などで学習状況を検証する。ギャップを埋めるためにどうするか、生徒が自分で考え、言語化し、実際に実行できるようにすることが、3年生0学期に求められる生徒の成長なのだ。

差とその克服の道のりを把握し自分の言葉で語らせる

2年生12月の面談や、1月のセンター試験への挑戦を通して、現時点の志望を明らかにする

模試の個人成績票などを活用して図2を作成。目標とのギャップを把握し、その克服のための学習法を考えさせる

生徒の分析とそこから立案した計画(図3)が妥当かを面談でチェックする

教科担任とも連携し、生徒の学習への取り組みを把握。意欲が低下しないようにフォローする